ふじわらのさねかたあそん

藤原実方朝臣

平安時代中期の公家・歌人

宮城県名取市を訪ねて

光源氏は名取に眠る!?

藤原実方朝臣はどんな人?

藤原実方朝臣は、平安時代のなかば（950 年頃）に当時の都であった京都で生まれました。

藤原氏は皇室との結びつきが深く大きな権力を持っていた貴族で、実方の祖父と養父も大臣として政治に大きく関わっていました。

彼は成長すると、左近衛中将という都を守る役目を担った一方、美しい顔立ちだったため、宮中の花形の貴公子として活躍するようになりました。

宮中の女性たちからもたいへんな人気を集め、紫式部の『源氏物語』の主人公光源氏のモデルの一人になったとも言われています。また、和歌の才能も開花し、後に「中古三十六歌仙」という特に優れた歌人たちの一人にも選ばれました。

ある花見の席でにわか雨に降られた時、他の参加者が慌てているなか、実方は落ち着いた様子で桜の木の下で雨に濡れながら歌を詠みました。

さくらがり　雨は降り来ぬ　同じくは
ぬるとも花の　蔭にかくれむ

※訳：お花見にきたら雨が降ってきた　どうせ濡れるなら花のかげに隠れて濡れよう。

雨に戸惑う他の参加者をよそに、美しく咲いた桜の下で雨に濡れ悠然と佇む実方の振舞いに人々は感心し、その風流さを称えました。

しかし、実方とライバル関係にあった藤原行成は、「歌は面白し、実方はをこなり」（歌はいいけれど、実方の振舞いは馬鹿馬鹿しく思える）と嘲笑ったのです。

それを聞いた実方は宮中で行成と話をしていた時に怒りにまかせ、行成のかぶっていた冠をたたき落とし、恥をかかせてしまいました。

当時人前で結んだ頭髪をさらすことは、とても恥ずかしいことでした。実方は情熱的でカッとなりやすい性格でもあったようです。

この様子を見ていた一条天皇から「みちのくの歌枕を見てまゐれ」（歌にもよく読まれるような、東北にある名所を巡ってきなさい）と伝えられ、実方は陸奥（当時の東北地方）の国司（地域における知事や裁判官の役割）の仕事を任されることになりました。

京都から陸奥国に移った実方は、職務を全うする一方、様々な歌枕も訪ねて回りました。

長徳４（998）年、出羽国（今の山形県）千歳山にある阿古耶の松を訪ねた帰りに、現在の宮城県名取市愛島を訪れた実方は、佐倍乃神社（道祖神社）の前を通りかかります。

そこで住民から「ここの神様はとてもありがたい神様なので、馬を降りて拝礼をして通った方がいいですよ」と教えられますが、彼は従わず、祀られている神様に対しても失礼な発言をして、馬を降りずに神社の前を通り過ぎようとしました。

しかし、罰が当たったのか急に馬が暴れて実方は落馬し、その時の怪我がもとで、地元の人の手当ても虚しくその年の 11 月 13 日に生涯を終えてしまいました。

実方は人生の最後に、悔しさをつづった歌を残しました。

みちのくの　阿古耶の松を　たずね得て
身は朽ち人と　なるぞ悲しき

※訳：みちのくの阿古耶の松を訪ねることはできたけれど、松の千歳の寿命に比べて限りある身が、この地で朽ちるのは本当に悲しいことだ。

▶ 藤原実方朝臣に関する年表

年号（西暦）	出来事
	生まれた年は不明
天延３（975）年	侍従に任命される
永観２（984）年	左近少将に任命される
正暦２（991）年	右近中将に任命される
正暦５（994）年 9月 8日	従四位上左近中将
長徳元（995）年 1月13日	左近中将兼任で陸奥守に任命
長徳元（995）年 9月27日	陸奥国赴任にあたり叙正四位下
長徳４（998）年11月13日	任地にて没（四十歳前後）

松尾芭蕉

佐倍乃神社鳥居（名取市）

実方の墓標（名取市）

市内に残る
実方ゆかりの場所

佐倍乃神社（さえのじんじゃ）

住　所／名取市愛島笠島字西台 1-4
駐車場／普通車 7 台（無料）

藤原実方は陸奥の国司として赴任中、この神社の前で神様に対して無礼を働いたため落馬したという伝承があります。

佐倍乃神社付近の「清水（しみず）」という屋号（家や屋敷に付けられた呼称）が残る地域では、その土地の堀口そばに綺麗な水が湧いており、藤原実方が実際にその水を飲んだと言われています。

佐倍乃神社参道の竹林

参道沿いの史跡笠島廃寺跡

佐倍乃神社がある愛島には、実方が訪れていたことを示す伝承と屋号がいくつか残っています。

実方が馬から振り落とされてけがをしたとされる地域は、「馬振（まぶり）」もしくは「馬守（まぶり）」という屋号で呼ばれています。その他にも佐倍乃神社北側の永禅寺（えいぜんじ）や塩薬師如来（しおやくしにょらい）がある地域は、落馬した実方が怪我の療養（りょうよう）をした家があったとされていることから「仮宿（かりやど）」という地名も残っています。

この実方の伝承は、地域の伝承に詳しい方やおじいちゃんから孫へという形で、古くから地元住民の間で伝えられてきました。

佐倍乃神社　松浦宮司

藤原実方朝臣の墓

住　所／名取市愛島塩手字北野 42
駐車場／普通車 5 台（無料）

様々な人達から尊敬を集めた藤原実方の墓には、後の有名な歌人や俳人が訪れました。明治時代の俳人正岡子規も、松尾芭蕉の『おくのほそ道』を辿る奥羽旅行の際に実方の悲運な死を哀悼する為に訪ねています。

藤原実方朝臣の歌碑

実方の墓左手後方にあり、「さくらがり　雨は降り来ぬ同じくは　ぬるとも花の蔭にかくれむ」の歌が万葉仮名で刻まれている。

西行法師の歌碑

文治２（1186）年秋、西行法師が訪ねた折に詠んだ「朽ちもせぬ　そのなばかりとどめおきて　枯野のすすき　形見にぞ見ゆ」の歌が刻まれている。

実方橋

墓守の仕事はご先祖様が実方の介抱をしたのがきっかけと言われています。墓守としては主に、塚の周りの草刈りや掃除を行っています。実方は有名な歌人であることから、参拝者はほぼ毎日いらっしゃいます。

藤原実方の墓守（お墓を管理する人）　板橋さん

草鞋塚（わらじづか）の碑

仙台の歌人松洞馬年の句碑。「笠島はあすの草鞋のぬき処」が刻まれている。

かたみのすすき

住　所／名取市愛島塩手字北野 42
駐車場／普通車 5 台（無料）

墓所の入り口には「かたみのすすき」と呼ばれるすすきが植えられており、ここで百人一首などで有名な平安時代末期の歌人である西行法師（さいぎょうほうし）が、

朽ちもせぬ　そのなばかり　とどめおきて

枯野（しもがれ）のすすき　形見にぞ見ゆ

※訳：朽ちることのない名声だけをこの世に残し、藤原実方はこの枯野に眠るというが、その形見は霜枯のすすきがあるばかりだ。

という有名な歌を詠みました。このすすきは葉が細く一般のすすきに比べてせん毛が少ないと言われています。

実方ゆかりの名取を歩こう！

実方通り

名取駅西口前から「実方通り」と名付けられた大通りがあり、実方朝臣の墓への道案内もあります。

歴史に名を残した
人物とのかかわり

松尾芭蕉（まつおばしょう）

実方の墓を訪ねようとしたのは正岡子規や西行法師だけではありません。『おくのほそ道』で有名な江戸時代の俳人（はいじん）、松尾芭蕉。元禄2（1689）年、彼は奥州・北陸の各地を弟子の曽良（そら）と共に訪ねた折、かの有名な藤原実方の墓を訪れようとしましたが、雨天で足元が悪くてたどりつけず、やむを得ず諦めることになった際に、

松尾芭蕉

笠島（かさしま）や　いずこ皐月（さつき）の　ぬかり道

※訳：実方の墓がある笠島はどこだろう。
この五月のぬかるんだ道では訪れることもかなわない。

という悔しさを表す一句を残しました。

この句は奥州街道沿いの道祖神路の碑（の南面）と、実方の墓の入口近くにある石碑の２か所に記されています。

私の歌と生きた証を
大切に思ってくれて
ありがとう

藤原実方

道祖神路道標（どうそじんろどうひょう）
（名取市登録有形文化財）

住　所／名取市植松字西向 62-1
駐車場／無し

旧奥州街道沿いの川内沢川にかかる橋のたもとに立つ高さ約 1.7m・幅 60cm の三面碑で、別名「芭蕉の句碑」または「笠島塚」「芭蕉塚」と呼ばれています。

芭蕉がおくのほそ道を訪ねた折に詠んだ「笠島やいずこ皐月のぬかり道　はせを」という句が刻まれています。

清少納言との恋の贈答歌

実方は幾多の女性と恋愛関係を持っていたと伝えられています。一条天皇の皇后である定子に仕え、随筆の『枕草子』を残した清少納言とも次のような交流があったと言われています。

実方は、清少納言と何度か歌を交わすうちに、真剣な恋心を抱くようになります。そして陸奥への旅立ちが決まり、次に会えるかさえも分からない別れが近づいたとき、彼女に事情を告げました。

清少納言

思ひだに　かからぬ山の　させも草
誰か伊吹の　里は告げしそ

※訳：思いもよりませんでした。あなたに伊吹のような遠い所へ向かうよう告げたのはどなたなのですか。

この彼女の歌に応じて実方は、掛詞を用いた歌で想いを打ち明けました。

かくとだに　えやはいぶきの　さしも草
さしも知らじな　燃ゆる思ひを

※訳：こんなにもあなたを想っていると、せめて言えれば良かったのですが、とても言えそうにありません。燃えるような想いを抱くほど私が慕っていたことは、あなたもご存じなかったでしょう。

藤原実方

清少納言は別れを惜しむ歌を送りました。

とこもふち　淵も瀬ならぬ　なみだ河
袖のわたりは　あらじとぞ思ふ

※訳：私が悲しみで寝込んだ寝床もふちになってへこみ、浅瀬になることなく流れ続ける涙の川になりました。陸奥の国の袖にある川も越えて向かいたいけれど、もはや渡れないだろうと思います。

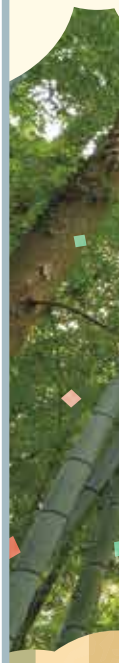
清少納言

さしも草とは、お灸の材料の「も草」のこと。「いぶき」はその名産地で歌枕にもなっている岐阜県の伊吹山と、「言う」という意味を掛け合わせた掛詞になっています。
また、「思ひ」と「火」を掛けているなど、実方は密かに焦がしてきた想いを巧みな言葉で伝えました。

藤原実方像「百人一首画帳」より　養朴常信筆

MEMO

制作 尚絅学院大学 総合人間科学部地域実践コース
SHOKEI GAKUIN UNIVERSITY

監修　：准教授　稲澤努
制作　：尚絅学院大学地域実践コース　星野裕太 島田千緩
協力・イラストデザイン：尚絅学院大学表現文化学科　齋藤あおい 佐藤茜 菊地美里

名取市商工観光課
〒981-1224 宮城県名取市増田柳田80　電話 022-384-2111